

池の平湿原（放開口）

石が散らばったこの急斜面は、「傾斜すべり断層」と呼ばれる現象によって生まれたものである。断層とは岩盤に生じたギャップを意味しており、傾斜すべり断層は岩盤の一部がこのギャップの上もしくは下にスライドすることで起こる。この一帯は北、東、西側は標高が高く、大昔にできた三方ヶ峰（さんぼうがみね）の火口縁となっている。崩落が起きるまで、池の平湿原（いけのたいらしつげん）はこの縁で完全に囲われていた。まるであたかも窓が開け放たれたかのように、この大きなギャップによって山の麓の小丘の素晴らしい景色が露出された。このエリアは放開口と呼ばれている。

この崩落が起きた理由には2つの説がある。1つは、地殻に断層ができた際に発生したという説だ。地殻の一部分が南東方向に移動したことで、火口南東側の沈下を引き起こし、火口縁の一部が他の部分から剪断されたと唱えるものである。2つ目は浸食を原因とする説だ。火口の南面は他の3つの面に比べて日当たりがよかったことから、冬に積もった雪の解け方が早く、雪解け水が多く発生した。その結果、長い年月をかけて雨水や雪解け水が火口縁の割れ目にしみ込み、斜面の一部がずれたことで、南東側が崩落。一帯に安山岩の巨石が多く見られるのは、その後の浸食によって露出したためだ、と唱えるものである。

この崩落部周辺の植物は、遊歩道近くに密生しているクロマメノキなど、峡谷から吹きつける強風に耐えることのできる低木にほとんど限られている。落葉性の低木であるクロマメノキはブルーベリーに似た食用の実をつけるほか、湿原に生息するミヤマモンキチョウの産卵場所となることが多い。

この放開口（ほうかいぐち）からは佐久盆地（さくぼんち）一帯を見渡せ、西から東に向かって、小諸（こもろ）、佐久（さく）、御代田（みよた）の各市街地を眺めることができる。